大阪国際中学校高等学校
WEBサイト・読み物
教職員のおすすめ図書
SEASON 2
Vol.08

人はどんな時でも変わり、成長することができる生き物なのです。

英語科
国際バカロレアコース
喜井 須賀

A Christmas Carol

Charles Dickens

── どんな中高生時代を送られていましたか？また、教員になった経緯を教えてください。

私は高知の田舎で育ち、地元の小さな町で小学校から中学校まで同じ友達と過ごしました。そのためか、「大きな町に行ってみたい」という憧れがありましたね。中学1年生で英語に初めて触れた際、英語を通じて世界が広がる感覚に夢中になり、英語への興味を深めました。高校は高知市内の英語科がある高校へ進学。親元を離れ、下宿しながら通うという高校時代でした。その高校では1日の授業の半分以上が英語という「英語漬け」の日々を送りました。私自身、英語の楽しさに支えられ、熱心に取り組みました。進学時には教師を目指して教育学部を志望しましたが、最終的には英文科に進学。そこで教員資格を取得しました。その後、社会人を経験し、結婚もして子育てを経験。ある程度いろんなことが落ち着いた頃に、晴れて教員の道を選ぶことにしました。英語が好きという気持ちを軸に進んだことで、結果的に今の職業に繋がったと思います。

── 今回先生が取り上げられた“A Christmas Carol”（以下『クリスマスキャロル』）。この本を取り上げたのはなぜですか？

『クリスマスキャロル』に出会ったのは、大学卒業後に1年間イギリスに留学していた時です。現地の書店に並んでいた絵本コーナーで偶然見つけました。12月という季節柄、クリスマスをテーマにした本に自然と目が行き、チャールズ・ディケンズの名前が目に留まりました。彼はイギリス文学を学んでいると必ず出会う作家ですね。私自身がこの作品を選んだのは「季節感」と「読みやすさ」からでした。

『クリスマスキャロル』は物語として非常にシンプルで、初めて英語で物語を読む人にも入り

やすい内容です。私が手に取ったのは英語学習者向けにリライトされたバージョンでしたが、ディケンズが書いた本来のストーリーの魅力が損なわれることなく伝わるものでした。物語の核心部分やメッセージ性は変わらず、生徒たちにも自信を持って勧められる作品だと思います。

――『クリスマスキャロル』のどんな部分に特に魅力を感じていますか？

『クリスマスキャロル』は、エベネーザ・スクルージという冷たく強欲な老人が主人公です。彼は他人との関わりを断ち切り、金銭だけを追い求める孤独な人生を送っています。しかし、亡き共同経営者のマーレイの幽霊が現れ、「三人の精霊が訪れる」という予告を受けます。その後、過去・現在・未来を見せられることで、スクルージが自分の生き方を見つめ直し、最終的に心温まる結末へと至る物語です。

特に好きなのは、スクルージが精霊たちとの出会いを通じて少しずつ変わっていくプロセスです。過去を振り返るシーンでは、彼の若い頃の純粋さや失われた愛が描かれます。それが、現在の孤独な姿と対比されることで、自分の選択がどれだけ影響を与えているのかを突きつけられるのです。

未来を見せられるシーンでは、自分の死後に誰からも悲しまれないという恐ろしいビジョンを目の当たりにし、ついに「変わらなければならない」と決意します。そして、ラストシーンでは、まったく新しい人物のように優しく温かい人間に生まれ変わり、甥の家族や周囲の人々と再びつながりを持つ姿が描かれます。この「人は変わることができる」というメッセージに、いつ読んでも胸を打たれます。

――この作品を読むことで、どのようなメッセージを伝えたいと考えていますか？

この物語の素晴らしいところは、主人公がどんな状況からでも変わることができるという希望を描いている点です。スクルージの変化を通して、人生においてお金や地位だけが重要ではないこと、他人とのつながりや思いやりがどれほど大切かを教えてくれます。

また、スクルージが過去を振り返り、自分の未熟さや過ちを認める場面は、読者に「自分の行いを見つめ直す」機会を与えてくれます。そして、未来を見据えて行動を変えれば、明るい結末を迎えることができるというポジティブなメッセージが込められています。

私自身、この物語を年末に読むと「一年を振り返り、次の一年をどう過ごそうか」と自然と考えさせられます。生徒にもぜひ、こうした深いメッセージを感じ取ってほしいです。

――英語学習者にとって、この作品はどのように楽しむのが良いでしょうか？

『クリスマス・キャロル』は、英語で読むのが理想ではありますが、まずは日本語の翻訳版を読んで内容を理解するのがおすすめです。特に村岡花子さんの翻訳は、日本語の美しさが際立っていて、とても読みやすいです。彼女はクリスチャンで、物語の宗教的な背

景も理解した上で丁寧に訳されています。表現が美しく、生き生きとしているので、原作の雰囲気をしっかり感じられるでしょう。その上で、英語版に挑戦すると、原文の表現の妙や、英語特有のリズムを楽しむことができます。

英語版を読む際は、一つ一つの単語に囚われすぎず、大まかな流れをつかむことを意識してください。分からない単語があっても挫折せず、想像力を働かせながら読むことが大切です。

── 大阪国際の生徒にこの本を読んで感じ取ってもらいたい点は？

この作品では、主人公のスクルージが過去や現在、未来を通じて自分の行動を反省し、他者との関わりを大切にすることを決意する場面が描かれています。スクルージは一度は心を閉ざしていた人物であったにもかかわらず、最後には他者への優しさや自分自身の内面を大切にすることに気づきました。最後のシーンでは、かつて甥っ子を冷たく追い返していたスクルージが、クリスマスを一緒に楽しむようになる姿が描かれています。最初と最後の対比が非常に印象的で、心が温かくなります。この物語を通して、人と人とのつながりや思いやりの大切さを改めて感じることができると思います。

私はこの作品を通じて、生徒たちに人はどんな時でも変わり、成長することができるという希望のメッセージを伝えたいですね。生徒たちにも自己成長の可能性を信じ、他人を思いやる大切さを学んでほしいと思っています。

また、英語科の教員としては、この本を読むことで、英語を「ただの言葉」ではなく、その背後にある文化や意味、感情を理解し、より深い学びを得るきっかけになればいいな、と考えます。特に、英語を通じて表現された音や言葉の響きの美しさを楽しむことが、英語学習の楽しさに繋がります。私は、生徒たちに対して英語を「覚える」だけではなく、「感じて楽しむ」ことが学びの一部であると伝え、在校生のみんなが英語に対してポジティブな態度を育むお手伝いをしたいですね。

インタビュアー
大阪国際中学校高等学校 教員　北村 円